

「自分とは」

浄念寺衆徒 梅溪順慶

我が家では毎朝「連続テレビ小説」を見ています。今月までは、トレインドナースとして看護の道を切り開いていった二人の女性が、「看護とは何か」を尋ねながら歩む姿を描いた、「風、薫る」という作品が放送されています。

八月の初めには、主人公の一人、一ノ瀬りんが、あるトラウマから看護婦としての働きができなくなり、新潟にある「高越女学校」の舎監として赴任することになったのですが、そこで「舎監らしく、先生らしく」有ることに悩む様子が描かれていました。それを交友関係のある小説家志望の青年・シマケンに相談の手紙を書いたのですが、私はその際のシマケンからりんへの返信の言葉が強く心に残りました。それは、「舎監らしく、先生らしくではなく、りんさんらしくいるのがずっといとしげであると思います」という言葉です。

振り返ってみると、私たちは日常の生活の中でいくつもの「顔」を持っています。私で言えば、社会でお付き合いするときの顔、友人たちといるときの顔、家庭の中での顔…。と、言った様々な状況に合わせた顔があって、そのときはそこでの立ち位置にのっとった「らしさ」を押し出しています。それは一面、社会に適合しやすいように行うことですが、もとをたどれば、傷つかない為に窮屈な生き方を選んでしまっているわけです。

ほとけさまのおみのりに照らせば、このような「らしさ」に喘ぐ姿を、自力のはからいと教えられます。親鸞聖人は、このはからいに気づかせるはたらきを「自然(じねん)」とお示しく下さいました。『末燈鈔』という親鸞聖人のお手紙の中に、「みだ仏は、自然のよう(様)をしらせんりょう(料)なり」とのお言葉があります。阿弥陀様は、いつでもどこでも、私たちに、「らしさ」に縛られていませんか、あるがままの自分とはどういう私ですか、と投げかけてくださっていることを思います。